

貴重書庫に入って 書物そのものの意味を 実感する

小林 照夫

大学院の前期課程では、今年度は、スコットランド産業革命を中心に講義を進めている。歴史研究は、第一次史料の取り扱いにあるので、史料の収集・吟味は、研究の重要な要素をなす。そんなこともあって、私の授業では図書館で文献や資料の検索をすることもある。

この度、院生と一緒に図書館に行ったのは、講義で再三紹介している文献、*The Statistical Account of Scotland, 1791-1799*の初版本があるので、それにあたるためであった。それは、当時(1791-1799)の各教区ごとの人口動態、社会・経済状況を、教区教会の牧師が纏めたものである。当時はそれなりに教区教会の役割が大きかったので、イングランドに比べて史料の少ないスコットランドの事情を知るためには、貴重な文献である。イギリスでは、1801年に、いわゆる国勢調査が行われ、その後、行政が刊行した史料(資料)を手にすることが容易になるが、それ以前の事情を把握するには、教区教会で保存されている史料を活用しなければならない。

この書物の全巻が3階の貴重書庫におさめられている。その書庫自体が「大きな金庫」になっているので、ライブラリアンに鍵を開けてもらい、院生と一緒にに入った。院生に「これが*The Statistical Account of Scotland*だよ」といって全巻を指さすと、そのうちの一人が「すごいですねこの装丁は」といって、一冊を手にし、つくりや重さを確かめながら、ページをめくりはじめた。どちらかというと、現代社会問題に関心を抱いている院生なので、古典に接する機会も少なく、この度の貴重本との出会いが、書物に対する彼の考え方を変えたようだ。

この貴重書庫の中心をなす蔵書の大半が初版本であるというのが、たまたま嬉しい。図書館に備えられている貴重書庫の目録の解題(本学経済学部教授星野彰男氏執筆)によ

ると、J. ステュアート『経済学原理』(1767)、A. スミス『国富論』(1776)、F. M. イーデン『貧困の状態』(1797)、T. R. マルサス『人口論』(1798)、D. リカードウ『経済学および課税の原理』(1798)、T. R. マルサス『経済学原理』(1820)の各初版は、社会科学の分野では貴重書の最たるものだそうだ。

久々に貴重書庫に入って実感したことは、初版本を手にして書物の持つ意味が拡大したことである。そして、こんなことを思い出した。それは、今から27、8年ほど前に、植村雅彦氏が英語訳聖書の裏表紙の挿し絵を通して、T. モアのイングランド社会における位置づけを論じたことがある。ヘンリー8世が宗教改革議会を開催すると、それまで禁じられていた英語訳聖書が刊行されるようになった。ある聖書の初版ではヘンリーの次にモアの絵が挿入されていた。ところが、次の版ではその箇所が空白になっている。植村氏はそのことを指摘し論を進めた。私はその時書物全体を通して書物の持つ意味が広がることを覚えた。

最近パソコンによる本の検索が容易になった。そして、必要な文献を依頼すれば、求めている箇所のコピーが入手できる。そのことによって作業能率は倍加する。しかし、私自身が歴史を学んでいるせいなのかどうかかわからないが、初版本にみる装丁や裏表紙のちょっとした挿し絵などが、著作の当時の状況やその背景を知る手がかりになることがある。院生と貴重書庫に入り、本を手にして、装丁や構成を見ているうちに、活字だけでは追いきれない書物そのものが持つ意味を、久しぶりに実感しあった。

(こばやし てるお/文学部教授)

